

30名の事務局の人たちが働いています。OA化は紺屋の白袴の例どおりで、現在改善中です。学会環境として、新しい拠点を確保したり、各種の活動に役立つようネットワーク、データベース、ニューメディアを整備するなど、進ん

だ総合環境にしていくのが念願です。

いずれにしましても、会員の皆さまのご理解とご協力があったとのこと、機会があればお立ち寄りいただき、忌憚のないご意見をお寄せいただければ幸いです。



(2) 学 会 誌

苗 村 憲 司

1. はじめに

1.1 本誌の役割は何か

会員諸兄は、毎月の本誌をどのように読んでおられるだろうか。

「表紙の主要記事名を見て興味のあるものだけを拾い読む」、「受け取るとすぐにみどりのページの研究会開催通知を読む」、「一応ざっと目を通す」、「まずはつんどく(?)」などなど、さまざまな読み方をされていることだろう。

本会に限らず学会にとって最大規模の会員サービスは学会誌の編集・発行である。それは全会員に毎月提供される唯一のサービスであり、またその経費が会費に占める割合も最大である。本会においても学会運営に関する重要課題の一つとして「学会誌の充実」があげられ、「3万人という多勢の会員のニーズに対応した内容にしていくこと」が求められている¹⁾。

では、学会誌が果たすべき役割は何だろうか。

本会が学会誌と論文誌を分離発行したのは、1979年1月、会員が1万人を超したときであった。その理由は「勢の大会員を対象に平易で読みやすい解説や啓蒙を論文誌とは違う観点で」²⁾提供することにあつたとされている。換言すれば、論文誌・研究会・大会などが会員の専門分野に関する最先端の成果情報を交換する場

であるのに対し、学会誌は、会員が急速に進歩する技術の「変化に適用できるように、たえず自分自身のポテンシャルを高め」ことをねらいとし「自分の専門から少しはずれた分野に関する記事を読んで」いただくために存在する³⁾とみることができる。この見方からすれば、本誌の記事は「専門外の技術者にとって役に立つ」ものでなければならず、「まず読んでもらえるように分かりやすく書くこと」が重要である。

従来より、学会誌編集委員会はこの考え方に基づいて会員の研鑽に役立つ技術情報を提供する努力をしてきた。このため、情報処理の広範な技術分野を偏りなくカバーすることをねらいとして

- (1) 基礎・理論
- (2) ソフトウェア
- (3) ハードウェア
- (4) アプリケーション

の4つの分野別小委員会ならびに文献ニュース小委員会を設置した。そして、合計約100名の委員のボランティアで献身的な活動と努力により、広範な技術分野を対象として会員にとって興味深いテーマを選んで特集・単発・連載の解説記事などの企画・編集を行い、優れた著者の理解と協力を得て質の高い記事を掲載することができたと考えている。

↑ 本会理事 日本電信電話(株)

1.2 それでも難解か

ところが、会員数の増大と同時にその構成が大幅に変化してきた。すなわち、昔は大部分を占めていた研究者が今は3割程度となりハードウェアメーカーやソフトハウスで製造の実務に携わる会員が増えてきた。しかも会員の平均年齢は「ここ数年間ほぼ変わらず36歳という若さを維持している」⁵⁾。極論すれば漫画世代が会員の主力になってきたと言えるのかも知れない。

専門分野の分化と会員構成の多様化にともない、本誌の内容が難しいという声が聞かれるようになった。そこで、1982年ごろ、本誌とは別にさらに読みやすさを追求した「第二情報処理」を発行する可能性の検討も行われたが、時期尚早ということで見送りになった。

しかし、創立30周年を間近に控えた一昨年、本誌が「難解過ぎるとの意見」⁶⁾が目立つようになり、理事会でもその見直しを求める声が強くなった。このために設置された「学会誌のあり方に関する委員会(略称G委員会)」（板倉委員長）は、有職者の意見をまとめ昨年春の理事会に提言として報告した⁷⁾。

理事会はこれを受け、その実施に向けた具体策の検討を学会誌編集委員会に要請した。その結果、学会誌編集委員会と事務局は毎号の企画・編集を続けながら同時に本誌の抜本改善策をも検討するという難題を抱えることになったわけである。

2. 「G委員会」の答申とは何か

2.1 指摘された問題点は

答申は、会員の意見としてさまざまな問題点を指摘し考えられる対策案を列記している。その中から本質的問題点を抽出し整理することは容易ではないが、類似の指摘事項をとりまとめると次の6項目程度になる。

(a) 高年齢・研究者中心から若年齢・実務技術者中心に変化した会員全般の要望に対応していない。

(b) 専門家にとってはレベルが低く不要であり、非専門家にとっては不親切で読みに

くい。

(c) 著者の主張が感じられずつまらなる(昔と同じ内容が繰り返されている)。

(d) 情報がタイムリでない。

(e) 会員にとっては、一方的に与えられるものとして存在するのみ。

(f) みどりのページの量が多く必要な情報が探しにくい、イラストは魅力に欠ける、などこれらの指摘の中には主観的・抽象的な事項も多いが、編集者としては謙虚に聞くべき問題と考える。

2.2 改善に関する提言は

答申は「会員3万人時代を迎え、メンバの大衆化、ヤングジェネレーション化の傾向が顕著である。新しい時代の学会誌は時代にマッチした変身が必要」⁸⁾であるとし、次の骨子の改善を提言している。

(1) 思いきり分かりやすい記述を追求する。

(2) サーベイ記事を企画し、親切編集で掲載する。

(3) 時宜に合ったテーマをよりタイムリに掲載する。

(4) 若い発想が反映できる企画を行う。

(5) 表紙および編集も斬新なイメージにチェンジアップを図る。

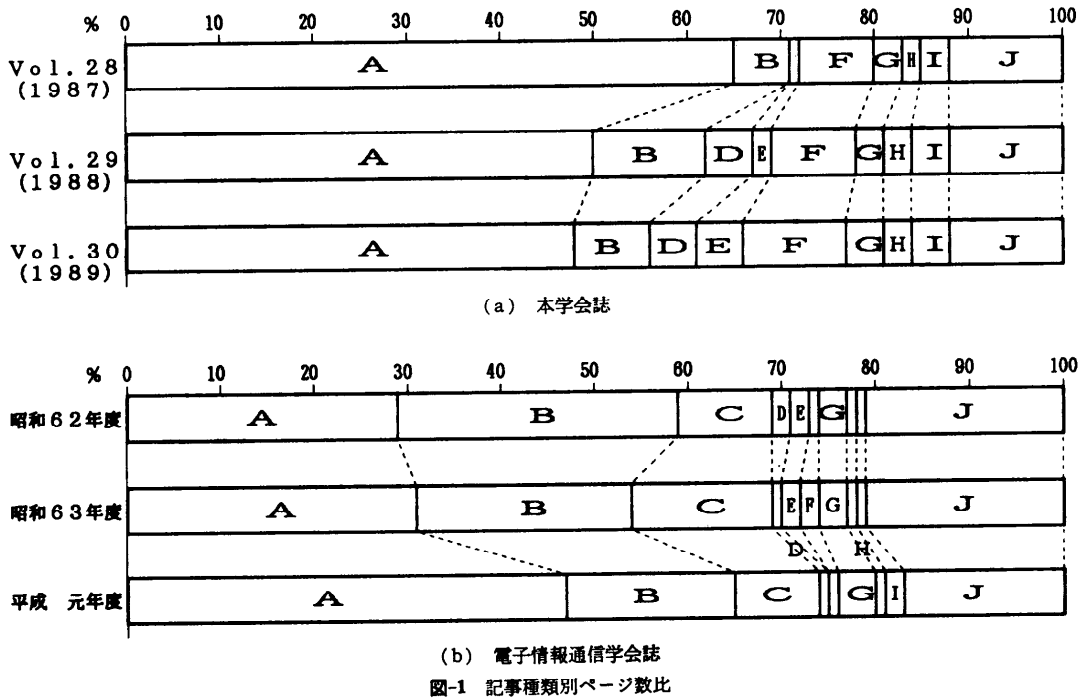
要するに、多数の若い会員が気楽に読んで新しい知識を得たり自己の能力開発に役立てることができるよう、学会誌を抜本的に改革せよというわけだ。

3. 学会誌の改革は本当に必要なのか

本誌は、編集委員と著者の努力によって質の良い記事を数多く掲載してきたにもかかわらず、なおも読みにくい、分かりにくいと言われるのは、いったいなぜなのだろうか。ここでは、最近のデータを基にその原因を探ってみよう。

3.1 記事の種類はどうか

まず、多数の会員の希望に沿う記事が十分に掲載されているかを評価するためのステップと



して、本誌と電子情報通信学会誌（以下、「信学誌」と略称）の記事の種類別分布を比較する。このため次のように両誌に共通の分類を定義し、最近3年間の記事量を調べた結果を図-1に示す*。

- A：特集（解説・展望）
 - B：解説・展望（単発／連載）
 - C：講座・学生のページなど
 - D：パネル討論などの報告
 - E：講演の記録
 - F：研究会報告
 - G：論文誌・欧文誌の梗概
 - H：規格調査会報告
 - I：図書・文献紹介
 - J：その他（みどりのページ、広告などを除く）
- 同図から、次のことが観測される。

(1) 本誌は、信学誌に比較して特集およびパネル討論・講演・研究会などの記録の量が多

く、これに対して単発／連載の解説などが比較的少ない。（なお元年度の信学誌で特集が増加した背景として、それまでは試行掲載していた色刷り・イラスト入り特別小特集を本格化した。）

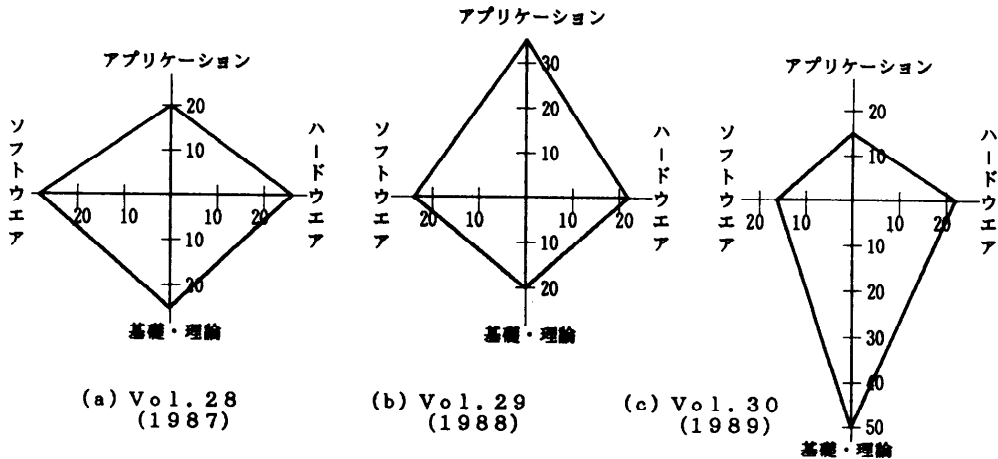
(2) 本誌の記事種目として「講座」（基礎的な問題について平易に系統的に解説したもの）が定義されているにも関わらず、この3年間まったく掲載されていない。信学誌は誌面の1割をこの種の記事に当てている。

このことから、気楽に拾い読みして知識を広めるために役立つものとしようとするならば、記録や特集の量を若干減らしても単発／連載の解説・講座などを増やすことを検討する価値がある。

3.2 分野のバランスはどうか

解説・展望記事（特集を含む）の量を上述の4分野に分けてみると、図-2のように年によってばらつきが大きいことが分かる。たとえば昨年の本誌だけを読んだ読者が記事の1/2が基礎・理論分野であることに気付き、もっと実務

* 本学会誌の記事種類別比率は学会事務局の統計データに基づき、また信学誌の記事種類別比率は文献7に基づき、それぞれ筆者が算出した。



注) 軸は、解説・展望記事(特集を含む)の総ページ数に占める各分野の比率(%)

図-2 解説・展望記事の分野別分布

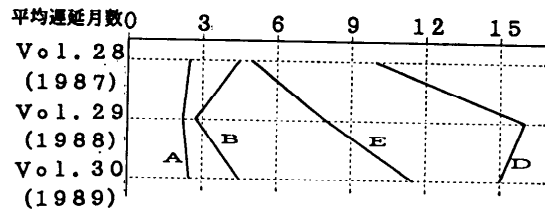
に役立つ記事を増やしてほしいと言われても不思議はない。

記事の企画から掲載までに2年程度かかるので、最初に4小委員会が同数の企画を立てても掲載時期にバランスが保てるとはかぎらない。しかし、可能なかぎり分野バランスを維持することが最大数の会員へのサービスのために重要であろう。

3.3 内容はタイムリではないのか

読者の立場からすれば、本誌が手元に届いた時点で最新の情報が記述されていることが「タイムリ」の条件であろう。これは著者(または講演者など)の見識と努力に期待する点が大きいが、編集側としては原稿受付日(または開催日)から発行までの遅延を最小にすることが求められる。

この観点から本誌の記事掲載までの遅延月数の平均を調べると図-3のように意外に長いことが分かる。特集記事(A)が受付後2~3カ月で掲載されるのに対し、単発の記事(B)は4~5カ月、パネル(D)・講演(E)などの記録は開催後1年前後かかっている。その理由の一つは、特集のために先の号のページを予約する習慣にある。この点はなんとか解決する必要がありそうだ。



注) 遅延月数とは、A(特集)、B(単発の解説・展望)については原稿受付日から、また、D(パネル討論報告)、E(講演記録)については開催日から、それぞれ発行月までの月数を数え、それから1を引いた値を示す。たとえば、9月X日に原稿受付(または開催)した内容の記事が10月号に掲載された場合は「遅延月数=0」となる。

図-3 記事掲載までの平均遅延月数の推移

3.4 編集・印刷はどうか

本誌を信学誌、電気学会雑誌(以下「電学誌」)、人工知能学会誌(以下「JSAI誌」)に対し編集・印刷関連について比較してみる。

(1) 全体的構成は、信学誌、電学誌ともおおむね本誌と同様であるが、表紙広告の掲載、大胆なデザインのカット、電算写植・オフセット印刷の利用など、本誌と異なる点も多く参考になる。JSAI誌は論文誌が未分離であり専門家向けの色彩が強い。

(2) 本誌は各記事の著者の紹介を巻末にまとめて掲載しているのに対し、他の3誌はいずれも記事の末尾に掲載している。これは内外で共通の傾向であり、読者に親しみをもたせる効

表-1 文字数と文字の大きさ(間隔)の比較

	文字数/頁 (比)	文字の間隔 (比)
本誌	24字×44行×2欄(1)	2.8mm×4.6mm (1)
信学誌	21 ×41 ×2 (0.82)	3.1 ×5.0 (1.20)
電学誌	22 ×46 ×2 (0.96)	3.2 ×4.6 (1.14)
JSAI誌	26 ×46 ×2 (1.13)	3.0 ×4.6 (1.07)

果があるかも知れない。

(3) 信学誌および JSAI 誌は巻末に編集者の氏名入りの編集後記を載せている。読者との会話のきっかけとなるようなら有効であろう。

(4) 1 ページ内の文字数と 1 文字当たりの面積を比較すると表-1 のようになる。物理的な読みやすさを追求するために本誌の文字をもう少し大きめにしたい。

4. 学会誌編集委員会はこれまでに何をしたか

昨年春、理事会の要請を受けた編集委員会は鋭意検討を続け、これまでに次のように進めてきた。

4.1 改善の方針が先決

G 委員会答申を参考としたうえでもう一度問題点の洗い出しを行って対策を検討した。その過程では「現状の学会誌は十分に役に立っているので特に変える必要はない」という意見もあったが、他誌との比較も考慮しともかく改善することを基本として方針を検討した。その結果は通巻 301 号の巻頭言⁶⁾の中で山田前理事が宣言しているの、読まれた読者も多いと思う。

特に読みやすい学会誌に変革することをねらいとし「対象となる読者層を明確にした上で、内容にあった著者をお願いすること」、「特集号では基本原理を分かりやすく解説する記事を含めることとし、これについては専門のテクニカルライタの支援も検討する」こと、充実したサーベイ記事を掲載することなどを決定した。また「若手技術者や学生会員にも容易に理解できる『講座』を強化し、学会の定説だけでなく技術革新の流れにあったテーマについて分かりやすい形で連載を行う」ことなども確認した。

4.2 次に編集体制の見直しを

従来の編集委員会は小委員会での検討結果を総花的にレビューし確認するのにほとんどの時間を費やしていた。上の方針に沿って抜本的改善を進めるためにはこれを見直し、本委員会は改善のための施策の決定とその実施状況の確認・評価を中心とし、毎号の企画・編集は小委員会を中心に若い発想を重視して進めることが必要となった。

この考え方で委員会体制を改善し、分野バランスを考慮して 4 つの分野別小委員会にはほぼ同量のページ数(年間 250 ページ)を割り当て、小委員会ごとに年度計画を立てて計画的に企画・編集を進めることにした。特集と単発・連載の比率、パネル討論の取扱いなどもこの一環で改善する予定である。

また「査読については、これまでの専門分野の編集委員に加えて他分野の編集委員も査読を行う二人査読制を採用し、専門外の人にも分かりやすい解説になるように努力」することとした。さらに査読の完了した記事から優先的に掲載号を決定することにより、記事のタイムリさを損わないよう努力する考えである。

5. そして今後の課題は

学会誌改善の施策は可能なものから逐次実行に移している。本号の編集に当たってはできるだけ新しい方針で編集した記事を集めるように努力した。会員諸兄からは是非忌憚のないご意見をいただければ幸いである。

今後の計画としては、来年の 1 月号を目途に新方針で編集した記事を中心とする形式に移行し、表紙のデザイン、編集・印刷形態を含めてイメージを一新する予定である。

しかし、会員の層の広さを考えれば、学会誌の理想像は一意に決まるものではない。改善の結果として従来の長所を減ずることも起こり得ることを覚悟しなければならない。その覚悟の上で今から 2~3 年をかけて改革に取り組むこととし、継続的にその評価とフィードバックを図る体制作りを行う必要がある。日本の将来を

背負う情報処理技術者に広く親しまれる学会誌に向けての改革を成功させるため、会員諸兄のご理解とご指導・ご支援を期待したい。

参考文献

- 1) 三浦武雄：会長就任にあたって，情報処理，Vol. 30, No. 6, p. 615 (1989).
- 2) 白井良明：情報処理技術者の将来と学会誌，情報処理，Vol. 30, No. 9, p. 1013 (1989).
- 3) 三吉健滋：情報処理学会とソフハウス，情報

- 処理，Vol. 30, No. 3, p. 205 (1989).
- 4) 板倉征男：会員3万人時代の学会誌，情報処理，Vol. 30, No. 7, p. 765 (1989).
- 5) 三木彬生：30周年記念事業に思う，情報処理，Vol. 30, No. 11, p. 1289 (1989).
- 6) 山田昭彦：分かりやすい学会誌を目指して—学会誌改善宣言—，情報処理，Vol. 31, No. 3, p. 311 (1990).
- 7) 昭和62年度事業報告，信学誌，Vol. 71, No. 6 (1988)；昭和63年度事業報告，同，Vol. 72, No. 6 (1989)；平成元年度事業報告，同，Vol. 73, No. 6 (1990).



(3) 論文誌

益田 隆 司†

和文論文は、当初は、学会誌に一般の解説、講座などといっしょに掲載されていたが、1979年1月から、論文誌として分離発行された。隔月刊としてスタートしたが、論文数の増加にともない、1986年からは月刊となった。過去5年間の投稿論文数、掲載論文数、総ページ数を表-1にまとめる。この間の論文採録率は約67%である。現在、採録決定から掲載までの期間は、約1カ月で、積滞論文の数は少なく、採録論文数と掲載論文数のバランスはよい。

論文誌編集委員会では、月に一度開催され、主たる業務はむしろ、投稿論文の査読に関することであるが、そのほかに現在検討していること、あるいは、近い将来検討すべきことには、以下のようなことがある。

1. 査読委員の拡充

和文論文誌では、2名の査読者による並行査読を行っている。査読者の意見がわかれたときには、必要ならば、第3査読者をたてる。表-1の投稿論文数からみると、年に延べ500人以上

表-1 和文論文誌に関するデータ (過去5年間分)

年 度	投稿論文数	掲載論文数	総ページ数
1985	186	143	1,164
1986	218	148	1,258
1987	225	147	1,327
1988	253	130	1,212
1989	232	181	1,662

の査読者が必要である。一方、現在、査読委員の数は約400名である。すべての査読者に均一に査読を依頼することは論文の分野のかたよりも不可能であり、どうしても同一の査読者に査読依頼が集中する傾向がでてくる。査読依頼が集中する査読者は、一般に査読も非常に迅速に行ってくださいる場合が多いが、そのような査読者に過度に負荷が集中することだけではできるだけさけたい。査読委員の数を増やすことは査読の集中化を解消する一つの有力な方法になる。また、これは査読期間の短縮にもつながることになる。今年度中に、査読委員の数をかなり増強することを考えている。

† 本会理事 東京大学理学部情報科学科